

80 まがいせきぶつぐん 磨崖石仏群



指 定 市有形文化財 昭和58年 3 月25日
 所在地 三 分
 所有者 三 分 区



三分荒卷山の斜面、岩崎観音堂参道のかたわらの自然石に、全長約1.03mと約98cmの五輪塔2基、全長約1.07mの多宝塔1基、全長1.04mの三重層塔1基、さらに全長約40cmの地藏菩薩像1基が、精巧に浮き彫りにされている。

磨崖仏とは、自然そのままの岩壁や、洞窟内の壁面の石に仏像を彫りつける造形をいい、古くインドに起こり、中国にはもっとも大きな磨崖仏が作られている。日本では奈良、平安時代に多く、特に平安時代は盛んで、北は東北から南九州まで広い範囲で造形されたと伝えられている。

佐久地方には、造形に適するいわゆる佐久石を産するため、石造仏は多くあるが、磨崖仏形式の造像は、一、二の線刻を見るばかりである。

その点三分区の浮彫像は佐久地方ではきわめて稀にみられるものである。

五輪の形式から中世の造立と見られ、当地方には類のない遺品である。

近くにあった蓮葉の池の伝説に関係があるように伝えられているが、造立の趣旨については今のところ不明である。また五輪塔については、後に建てられた供養塔に、五輪が3基とあるところから、五輪塔3基あったものが1基は基岩とともに崩落欠失したものとされる。